

## 溝口秀勝

### 出生から大名になるまで

溝口秀勝は、天文 17 年（1548）、尾張国（現・愛知県）西溝口村の地侍・溝口勝政の長子として生れ、幼名を竹、後に金右衛門尉定勝と称しました。20 歳の頃から織田信長の勇将・丹羽長秀に仕えて武功を立て、次第に頭角を表わすようになります。天正 9 年（1581）、若狭国（現・福井県）高浜城主（5 千石）となり、天正 11 年（1583）には加賀国（現・石川県）大聖寺城主（4 万 4 千石）になりました。

高浜時代は、本能寺の変、賤ヶ谷の合戦と出陣があいつぎ、定勝は軍事面に忙殺されますが、わずかな時間の間隙を利用し、逸見、織田の遺臣召抱による家臣団の充実をはかるなど、民生面への腐心も怠りませんでした。

大聖寺時代の事跡としては、金沢城警衛（1584）、一向宗徒の撫育、島津征伐従軍（1587）、大仏殿造営手伝い（1889）、刀狩り、小田原征伐従軍（1589）、文禄・慶長の役における肥前国（現・長崎県）名護屋本営在番（1591）などがあげられます。

天正 13 年（1585）、丹羽長秀が没すると、定勝は羽柴秀吉に直属する独立大名となり、このとき秀吉から秀の一字を賜って名を秀勝と改めました。

### 苦渋の選択

高浜城主時代、忘れられないものに賤ヶ谷の合戦があります。秀勝は、この合戦で秀吉軍に加わり、敗走する柴田勝家を追撃して大功をたてますが、その際、勝家方にいた実弟の半左衛門勝吉を討ち死にさせてしまいます。

このとき、秀勝は、敵方である勝家軍に家臣の一部を送っていました。この行為は、武士道倫理からいって矛盾であり、また、身内どうしが敵味方に分かれて戦うことは残酷でもあります。とはいえ、これは、どちらが勝った場合でも家として生き残るための戦国時代の知恵であり、秀勝にとって苦渋の選択でありました。

### 大名としての位置

秀吉の大名統治機構下では、2、3 の小さな大名がひとつの大きな大名の下に系列化されていました。しかし、そこに厳格な主従関係はなく、あくまで戦時などにおいてお互いに協力し合うことを目的に組織されたものでした。この系列関係を与力と言います。秀勝は、

村上頼勝（6万6千石）らとならんで、堀秀政（18万石）傘下の与力大名でした。

### 越後入封と新発田藩立藩

慶長3年（1598）正月、上杉景勝が会津に移ると、越後国は数多くの中小領地に再分割されます。そして、同年初夏、秀吉の命を受けた秀勝は、大聖寺から越後の中北部領域に入封。ここに新発田藩を立藩しました。

新発田藩の領地は、現在の加治川以西の新発田市、豊栄・亀田・沼垂・白根（現・新潟市）、加茂市、三条市、さらに中之島（現・長岡市中之島）にまたがる広大なもので、入封時に打ち出された石高は6万石とされています。なお、現在、新発田市となっている赤谷地区は、当時は会津領でした。

このとき、与力の関係にあった堀秀治（堀秀政の子）が越後高田に、村上頼勝が越後村上に入り、それぞれ立藩しています。

### 民族移動のような大行列

入封に際して秀吉は、「家中の侍だけでなく、下級武士、下男奉公人も残らず連れて行くように。逃げた者も残らず捕まえて連れて行くように。ただし、百姓は置いて行くように」と命じ、秀勝はこれを実行しました。家臣だけでなく、士分扱いの御用商人や職人集団のすべて、さらに専光寺、大麟寺の諸寺がこれに従ったので、総人数は推定9千人にものぼり、行列は一大民族移動の観を呈したとされています。

この「一切召連」にこめられた秀吉の意図は、検地や刀狩りと同じもので、中世の旧秩序を一掃し、近世の新秩序建築をめざしたものでした。旧領地に百姓を置いていかせることで、領主と領民の関係を一旦清算し、領主も領民も新たにまるごと新秩序に再編入しようとしたのです。この政策は、その後の、徳川幕藩体制にそのまま引き継がれていきます。

### 越後上杉遺民一揆

新発田到着後、さっそく新発田五十公野に仮の居を定めた秀勝は、すぐに新発田城の築城に着手、町方村方への法令等を発布し、藩領経営を開始しました。しかしそれもつかの間、同年八月に秀吉が病没。天下の情勢は再び不安定となり、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いへと発展していきます。秀勝はやむなく東軍方について戦いますが、このとき、領内各地で農民一揆が勃発しました（越後上杉遺民一揆）。秀勝は一時苦戦しながらもこれを制圧し、のちに家康から感謝状を受け取っています。慶長8年（1603）、征夷大將軍徳川家康から正式に新発田藩本領安堵が下知されました。

## 後継者の育成に明け暮れた晩年

関ヶ原の戦い後もしばらくの間は、反徳川の火がくすぶり続けており、豊臣恩古の外様大名であった溝口家は、いつ改易されてもおかしくない状況下にありました。

しかし、秀勝は、老いて後も細心の注意を怠らず、世子宣勝をよく補佐し、慶長 10 年（1605）、将軍秀忠上洛随行、同 12 年には江戸城普請手伝いなど、平和時には平和時の難しい仕事を、粛々とこなしていきました。

慶長 15 年（1610）9 月、大坂夏の陣、豊臣氏滅亡を 5 年後にひかえた秋、新発田に於いて卒去。休むまもなく走り続けた 63 年の生涯でした。

## チャンスと不安の戦国時代

混乱の時代は、チャンスのある時代でもあります。秀勝の生きた戦国時代は、たとえ身分の低い者でも才能や幸運しだいで大名や天下人になれる可能性に満ちていました。特に戦国時代の終わり、織田信長の出現によって天下統一の気運は高まり、英雄たちの興亡劇がいつそう激しさを増していました。一介の地侍から身を興して大名となった秀勝自身、そうした時代精神の生き証人と言えるでしょう。

反面、常に繁栄と滅亡が隣り合わせにある不安定な時代でもあり、秀勝は、織田家、柴田家、丹羽家、豊臣家と、隆盛を誇ったかつての主家の滅亡を目の当たりにして生きてきました。

## 兵農分離と近世新秩序

新発田入封後の秀勝の功績として特筆すべきものに、「越後上杉遺民一揆」の平定があげられます。

戦国時代の大名は、その家臣団の基礎を土着の中小開墾地主層においていました。彼らは兵農未分の武士団で、国人とも呼ばれ、自ら直接支配する領域において強い自治性と独立性を有していました。ですから、ひとりの主君に仕えていても、状況次第でいつでも、その主君を裏切って他に乗り換える可能性がありました。また、戦国大名自身がこうした国人のひとつが強大化したものにほかならず、越後の上杉氏はそのような典型的な戦国大名のひとつでした。ですから、他領から家臣団すべてを率いてやってきた溝口家の越後入りは、暗黙のうちに土着勢力の衰亡を意味し、彼らの中にはこれを快く思わなかったものが多かったのです。

こうして関ヶ原の戦いが起ると、くすぶっていた不満は、一揆となって一気に表面化してきます。上杉軍が会津から越後領内に進攻すると、それに呼応して一揆は、野火のように越後全土に広がっていきました。会津方面の防衛に兵力を割かなければならなかった

こともあって、始め秀勝は苦戦を強いられます。いつとき三条城が一揆勢に包囲される事態が生じ、情勢は、関ヶ原の成り行きによって全く予断を許さないものとなっていました。平定後に家康が秀勝に宛てた感謝状が遺っていますが、その文面からこのときの緊迫した雰囲気伝わってきます。

結果としてみると、この事件はその後の新発田藩安定支配に大きな意味を持っていました。入封後わずか 2 年の早い時期で旧勢力を一掃し、新しい秩序建築の基礎を得ることができたのです。兵農分離と土地所有関係の白紙化は、新田開発の進捗にも大きな意味を持っていました。

## 大胆さと細心さ

越後一揆における秀勝の逸話を一つ紹介しましょう。あるとき、三条城が一揆勢に包囲されて援軍を求めているという一報が秀勝の耳に届きます。秀勝はただちに自ら兵を率いて三条に向かおうとしました。すると諸将はこぞって、留守中、会津軍の攻撃で新発田城が落ちるかもしれないと説き、出陣を思いとどまらせようとしてしました。しかし、秀勝は「みな申すことにも一理あるが、出陣しないまま、もし三条城が落とされ、そして会津も押し寄せなかったら武門の名折れじゃ。帰ってくるまでしっかり防いでいよ」と言い放って三条に出陣したといひます。細心な中にも豪胆な戦国武将としての秀勝の面目がうかがえるエピソードです。

江戸時代初期は、多くの大名、特に旧豊臣系外様大名が多数改易され、没落していった時代でした。いっしょに越後入りした堀家が慶長 15 年(1610)に、村上家が元和 4 年(1618)に早くも改易されています。新発田藩が改易を受けることなく、明治維新まで大名としての命運を保つ事が出来たのは、攻守絶妙のバランス感覚を持った秀勝の布石に負うところが大きいと言えるでしょう。

(参考)

- 『新発田市史・上』
- 鈴木康 『シリーズ藩物語 新発田藩』 現代書館
- 小村弑 「溝口氏における近世大名成立史序説」 新発田郷土誌第 4 号